

2026年7月19日 説教「盲人の信仰と癒し」

ルカの福音書 18章 35～43節

今朝もルカの福音書 18章から学んでいきましょう。医者であり、パウロの伝道旅行によく同行した弟子ルカが見て、伝えた癒しの記事です。

1. 物乞いをしていた盲人 (35～37節)

①ある盲人が道ばたに (35)「イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。」

イエス・キリストはこの後にエリコを訪れて、エルサレムに向かうことになりますが、今朝の記事はエリコに入る直前の出来事です。エリコ古くからの町で、ヨシュア記にも出てきます。エリコの町に入る途上の道路端に、その人はいたのです。彼は盲人でした。道ばたに座って物乞いをしていました。マルコの福音書では、バルテマイという名前が出てきています。マタイの福音書では二人の盲人とありますが、この辺りは物乞いがしやすい場所だったのかもしれません。

②盲人の質問 (36)「群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。」

イエス・キリストがエリコに向かう時にも、人々はその後を追っていきます。しかし盲人にとっては、そのざわつきの理由がわかりません。ともかく、いつもとは違う熱気のようなものがありました。人々から漏れてくる言葉から、彼は何もしないで済ませて良いとは思われませんでした。そこで、彼は通行人に、「これはいったい何事ですか」と尋ねたのです。

③盲人の質問への答え (37)「ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、」

すると、答えがありました。「あのナザレのイエスがお通りになるのだよ」ということでした。それを聞いて、ある者は「何だ、たかがナザレ出身の人が来ただけだろう。自分には関係がない。」という人もいたかもしれません。しかし、イエス・キリストが癒しをしてくださる方だということを、この盲人も知っていて、何としてもお会いしたいと思いました。

2. 主の憐みを求めた盲人 (38～40節)

①私をあわれんで下さい (38)「彼は大声で、『ダビデの子イエスさま。私をあわれんでください。』と言った。」

そこで、その盲人は大声で叫びました。『ダビデの子イエスさま!』。『ナザレのイエスさま!』ではなく、ダビデの子イエスと呼んだのは、その方がダビデの流れから生まれ、旧約聖書で約束されているメシヤ(救い主)であると確信したからでした。彼は、『私を憐れんで下さい!』と叫びました。18章9節以下で学んだ、パリサイ人と取税人のたとえ話に出て来る取税人も、『罪人の私を憐れんで下さい』と告白していました。それは、神なる方の前に謙遜になり、憐みを請う人の姿でした。キリエ・エレーソン(主よ、あわれみたまえ)です。

②たしなめにもかかわらず (39)「彼を黙らせようとして、先頭にいた人々

がたしなめたが、盲人は、ますます『ダビデの子よ。私をあわれんでください』と叫び立てた。」

盲人が大声で叫んだので、先に行く人々が、彼を黙らせようとしたのです。その様子は、この章のなかにある人々と似ています。誰の事でしょう。それは、子供たちとその親たちがイエスの所に殺到したときに、彼らを注意したイエスの弟子たちです。しかしここで、盲人は黙りませんでした。それどころか、さらに大きな声で、「あわれんでください」と叫びました。

③イエスの対応 (40)「**イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。**」

すると盲人の叫ぶ声を聞いたイエスは立ち止まりました。そして、その人を、自分のところに連れてくるようにと言いつけられたのです。もちろん、必死に叫ぶ声と必死な様子が癒し主に届いたのです。この盲人の叫びのなかに真実を認めてくださったのです。

3. 見えるようになった盲人 (41～43 節)

①何をしてほしいのか (41)「**彼が近寄って来たので、『わたしに何をしてほしいのか』と尋ねられると、彼は、『主よ。目が見えるようになることです』と言った。**」

イエス・キリストは盲人のほうに近寄ってくださいました。そして、『わたしに何をしてほしいのか』と尋ねられました。すると、盲人はためらいなく率直に、『主よ』と呼びかけたうえで、『目が見えるようになることです』と述べました。遠慮して、「生活が良くなることです」とか「援助者が必要なのです」とかいったこと以上に、彼の持っている一番の望みを率直に伝えたのです。

②見えるようになれば (42)「**イエスが彼に、『見えるようになれば。あなたの信仰があなたを直したのです』と言われると、**」

イエスはその盲人に『見えるようになれば』と権威をもって言われました。その理由は、『あなたの信仰があなたを直したのです。』でした。つまり、この盲人のうちに、イエスを救い主とし、キリストにはいやす力があると信じて求める心を認めて下さったのです。盲人の側では、ただただすがる思いで、イエスの前に出たのですが、それを受け止めてくださったのです。

③神をあがめて (43)「**彼はたちどころに見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。**」

イエスのお言葉で盲人はすぐに見えるようになりました。闇の世界に光が射したのです。見えずに絶望したこともあったでしょう。相当の苦勞もしたでしょう。物乞いをして生活するしかありませんでした。その日までは、ずっとそのままのつもりだったかもしれません。しかし、今や見えるようになったのです。彼は、目が見えるようにしてくださった神をほめたたえ、イエスについていきました。また、この様を見た人々は神を賛美しました。ハレルヤという声が響いてきます。

《結論》

今朝の聖書箇所から、三つのことを学びましょう。

第一に、イエスが「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねられたのに対し、「主よ。目が見えるようになることです」と答えた点です。すでに各節の学びでもお伝えしたように、それは真に率直な受け答えでした。いろいろな人の思いを忖度をしたり、遠慮して願っていることを、正直に言わないと、あるいは言えない時があります。この国の民の間では、遠慮は美德である場合があるのは確かです。しかし、主なる神に対しては遠慮する必要はありません。神のみ思いを忖度する必要があるでしょうか。いや、率直に願うことが必要です。「求めなさい。そうすれば与えられます」は率直に求めることを示しています。

第二に、この盲人の「見えるようになることです」という願いに対して、主イエスが、この男の信仰をみて、見えるようにしてくださったという点についてです。主なる神の恵みの愛はいやしというかたちで現わされました。一昨年の秋に、姉ヶ崎キリスト教会で行われたチャペルコンサートでご奉仕くださった北田康広師は全盲です。おそらく、見えるようにしていただきたいと願われたのは一度や二度ではなかったことでしょう。しかし、主はそれに対して答えてくださっていません。主は北田氏を愛しておられないのでしょうか。いいえ、神は盲目をギフト(賜り物)として与え、喜ばしく生きるために用いてくださっているとご本人が証しておられました。北田氏は見えないのではなく、見えるようにされたのです。神の愛はそのようにして現わされたのです。

第三に、この盲人は見えるようになった時、神をあがめながら主について行ったということ、またこうした出来事を見た人々が神を賛美したという点です。神をほめたたえることは麗しいことです。信仰者にとって、主を賛美することは信仰の中心にあります。この盲人が、目が見えるようになった時にしたことは、神をほめたたえることでした。また、そこにいた人々がそうせざるを得なかったのも、神をほめたたえることでした。人間にとって、心の底から霊的に喜ばれるときに、出てくることは神を賛美することです。そこにこそ、平安や慰めがあるのです。北田先生も、全盲の人として、神の栄光をあらわし、神をほめたたえ、喜びをもって生きていることを、証ししてくださいました。

讃美歌 270 番の 3 節の最後に「ますぐに御神に、近づきゆかん」とありますが、「ますぐに」はためらわずに率直に、主に求めることです。私にとりましても、今週は心臓の冠動脈のカテーテル治療を受けます。つまってしまっている血管が開かれ、ステントが入れられるまで、治療が進むようにと願います。この盲人の信仰が私にも与えられるよう、祈って臨みたいと思います。そのため、お祈りもお願いします。

今朝の聖書箇所に出て来る盲人にとって、目が見えないということは、その人生全体に関わるハンディーでした。しかし、目が見えても、誰しも人生の重大な課題があるでしょう。いつも、心のどこかにあるその問題についても、主の前に、「こうしてください!」と叫んで良いのです。主の助けと導きがありますように。